

研究所報

No.57

2010. 10. 1.

目次

『親鸞像の再構築』の成果に期待する	1
2009(平成21)年度「指定研究」研究経過報告	2
2010(平成22)年度「一般研究」(追加)研究組織一覧	11
2009(平成21)年度「一般研究」研究結果概要	11
学術共同研究報告	17
海外研究調査報告	18
彙報	20

『親鸞像の再構築』の成果に期待する

大谷大学長 草野 顕之

明年、2011年に私たちは親鸞聖人750回御遠忌を迎える。大谷大学は、親鸞聖人を宗祖と仰ぐ真宗大谷派が設立した大学であり、仏教、就中、浄土真宗を建学の精神としている。そうしたことから、2005年度には、真宗総合研究所に特別指定研究として「親鸞像の再構築」をテーマとする研究班を発足させ、御遠忌に向けた研究活動を開始したのである。

爾来、6年間に亘る研究活動は、①史的な親鸞像の再検討、②思想教学の検証、③現代における親鸞思想との出会い、④文献目録の作成、の4部門から行われ、チーフを中心とする研究員、外部識者からなる嘱託研究員、日常業務を担当する研究補助員などのスタッフによって深められてきた。そして本年度は、それらの研究成果をまとめて、この特別指定研究は終結する。

私自身、この研究班の発足当初から研究員として関わってきたが、この4月に学長に就任したことにより辞任することとなった。研究員としてあったこの間、この研究班で行ってきた共同研究作業が、私自身の研究内容に大きな影響を与えてきたことを考えると、最後まで研究員でいれなかったことは残念でならない。

思い起こせば、この研究班による研究活動は、先に挙げた4部門のうち、①史的な親鸞像の再検討と、④文献目録の作成が先行する形で行われることになった。そのため、まず、私が専門としている歴史分野に関して、内部・外部の研究者による問題提起と、それについての質疑応答を行う研究会が繰り返し開催された。そのことを通して、歴史的親鸞像の再構築に向けての、現代的課題が明らかになってきたといえよう。

小山正文氏による親鸞の俗姓に関する問題や、平雅行氏による善鸞義絶状の問題と「承元の奏状」の問題、本多弘之氏・井上円氏による『教行信証』後

序に見える「名の字」をめぐる諸問題についてのご報告は、従来の研究が曖昧にしてきた問題、また見過ごしてきた問題にメスを入れたもので、「親鸞像の再構築」に相応しい、極めて新鮮な内容であった。

また、塩谷菊美氏の近世親鸞伝に関する諸問題や、佐々木正氏の『親鸞聖人正明伝』を評価し直すべきとの問題提起は、語り継がれた親鸞像(伝承)と史実の親鸞像の関係をどう考えていくのか、我々に大きな課題を与えるものであった。私自身、塩谷・佐々木両氏の課題と共通する問題を抱えていたので、新潟に残る親鸞伝承を紹介するという、極めて雑ばくな研究報告を行ったが、このことは改めて論じるつもりである。

こうした研究会の内容は、『親鸞像の再構築(一)～(四)』という小冊子にまとめられているので、ご参照いただければ幸いである。

当初、①と④とを先行させて行われてきた研究活動は、2006年度くらいから②思想教学の検証や、③現代における親鸞思想との出会いに関する研究報告も開催されるようになり、名実ともに「親鸞像の再構築」研究は進展していった。

そうしたなか、この特別指定研究の研究成果を論集という形でまとめていこうという気運が盛り上がってきた。研究報告をしていただいた方は勿論のこと、そうではない学内教員やOB教員にも呼びかけて、ある程度絞った内容の原稿をお願いすることで、内容的に一貫性を持った論集を編纂しようというのである。

幸い、多くの方々の賛同をえて何度かの執筆者会議ももたれ、現在は、いよいよ編集段階にさしかかっている。この論集が、先の御遠忌以降50年間に進展した親鸞研究の粋を集めた内容となり、今後50年の親鸞研究をリードするような存在となってくれることを大いに期待している。

2009(平成21)年度「指定研究」研究経過報告

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念 特別指定研究

親鸞像の再構築

チーフ・教授 門脇 健
(宗教学)

【研究班の目的】

本研究班は、2011年の親鸞聖人750回御遠忌に向けて発足した特別指定研究班である。「親鸞像の再構築」というテーマを掲げているように、前回御遠忌以降の50年間に於ける親鸞研究の動向を踏まえて、これからの親鸞研究に新たな展望を開くことを目的としている。

【2009年度活動報告】

1. 御遠忌記念論集『親鸞像の再構築—親鸞を訪らう—』の企画

本研究班では「親鸞像の再構築」という研究テーマの下、真宗学、歴史学、哲学など様々な専門分野の研究者を講師として招き、公開研究会を重ねてきた。今年度はこれまでの公開研究会の成果を振り返り、現在親鸞研究においてどのような課題があるかを議論してきた。その成果として、以下のような「親鸞像の再構築」の方向が確認された。

- (1) 明治以降、『歎異抄』が広く開放されたことにより一般的親鸞像が形成されてきた。しかし『教行信証』の思想に基づく親鸞は十分に理解されているとは言い難い。よって、『教行信証』に基づいた親鸞像を「再構築」する。
- (2) 『恵信尼消息』の発見以降、史実上の親鸞の明確化が歴史学の課題となり多くの成果を上げてきた。そこでの未だ究明を要する問題を明らかにするとともに、伝承上の親鸞像の考察をも課題とすることで、信仰の広がりの中で語り継がれてきた親鸞像を「再構築」する。
- (3) 先の御遠忌の頃は主体の確立という問題が政治的にも実存的にも焦眉の課題であったが、そのような中で「他者との関係に基礎づけられる主体」という視点が軽視され、多くの社会的問題を惹起している。親鸞の「他力」という思想を導きの糸としながら、新

たな主体の可能性を「再構築」する。

御遠忌記念論集を作成し出版することは昨年度中に計画されてあったが、以上のように方向性をより明確化して執筆予定者の協力を仰ぐこととなった。

論集の刊行は、現在岩波書店と交渉している。岩波書店からは岩波文庫として金子大栄校訂の『歎異抄』(1931年発刊)、『教行信証』(1957年発刊)、名畑応順の『親鸞和讃集』(1976年発刊)が刊行されている。これらが20世紀の日本における親鸞思想の受容を牽引してきた。今回の論集は先学の仕事を基盤としながら、これらのテキストを21世紀の現在の時点で読み直す新たな視点を提示したい。また「仏教を広く学界に開放する」という大学の理念を実現するためにも岩波書店から公開すべきであると考えている。

岩波書店側と交渉する中で、上下二巻の論集とすることが構想されている。上巻は『教行信証』における親鸞、下巻は「歴史的現実における親鸞」というテーマとしている。下巻は更に「歴史編」と「現代編」とを設けている。執筆予定者からはそれぞれのテーマに沿った題目と内容に関するキーワードを提出いただいた。そして論集全体の構成を見通し、研究員によって題目等の調整を行った。

2. 公開研究会の成果報告(出版)

過去に開催した研究会の内容は、冊子化して公開してきたが、未刊行のものを出版した。

『親鸞像の再構築』第四輯 2010年1月29日発刊(大谷大学真宗総合研究所)

- ・親鸞伝研究の諸問題 草野顕之
- ・「親鸞伝」の光と影—「正明伝」をテキストにして— 佐々木正

3. 公開研究会の開催

下記の通り、論文執筆予定者を招いて公開研究会を開催した。

①日 時：2月26日(金) 15:00~17:00

場 所：マルチメディア演習室

報告者：安富信哉(大谷大学特任教授 当研究班嘱託研究員)

講題「親鸞の往生観」

：延塚知道(大谷大学教授 当研究班研究員)

講題「『歎異抄』と『教行信証』」

安富氏は、約20年前に起きた『岩波仏教辞典』(1989年発刊)掲載の「往生」の解説を巡る論争を起点にし

て、親鸞の往生観をご報告いただいた。法然とその門下の往生観を明らかにした上で、親鸞の往生観には、法然の思想から継承している面と展開している面とがあることを提示された。そして親鸞の往生観は「往生道」として理解するところに、その独自性が見出せることを確かめていただいた。

延塚氏からは『歎異抄』の思想と『教行信証』の思想との違いを明らかにしていただいた。親鸞思想の基本用語である浄土・往生・他力などを理解するには『教行信証』に依らなければならないことと、現在の『教行信証』研究の諸問題についてご報告いただいた。

②日 時：3月17日(水) 14:00~16:00

場 所：マルチメディア演習室

報告者：草野顕之（大谷大学教授 当研究班研究員）

講題「親鸞伝における史実と伝承」

：池上哲司（大谷大学教授 当研究班研究員）

講題「倫理と宗教の限界」

草野氏からは、新たな親鸞伝研究が模索されている近年の研究動向を踏まえ、親鸞伝研究の根本史料として重視されてきた『親鸞伝絵』を相対化する試みを、「熊野参詣」の段を例に取り上げて示された。また、『親鸞聖人御因縁』『親鸞聖人正明伝』など他の伝記に見られるような古い伝承や複数の地域に残る類似した伝承を活用し、そのような伝承が語り継がれてきた意味について考察する必要性を指摘された。

池上氏は、倫理と宗教の関係の問題について提起された。まず、カント、清沢満之を取り上げ、両者において倫理と宗教の領域がはっきりと分けられていることを指摘された。さらにボンヘッファーを取り上げ、キリスト教の牧師である彼がいかにしてヒトラーの暗殺計画に加わったのかという倫理的問題について考察された。

両日とも発表に対して参加者から活発な質疑が為された。『教行信証』の思想に基づく親鸞像を再構築するという研究班の目的を遂行していく上で、今回の研究会は、現在の親鸞研究の課題を共有すると共に、『教行信証』の思想における親鸞を語ることの意義を改めて確かめる機会となった。

4. 文献目録の作成

前回の御遠忌以降の50年間（1961~2011）にわたる親鸞研究を概観するのに資するデータベース並びに文献目録の作成を目指している。2006年度に定めた作成方針に則って継続的に作業を遂行中である。

日本語文献の単行本については、『仏教書総目録』に基づくデータ入力を行っているが、本年度は入力済み

のデータを見直し、修正作業を行った。更に入力作業を並行して進め、1996年度分（『仏教書総目録』No.13）まで終了した。

また、学術雑誌所収論文については、『親鸞教学』『真宗研究』『真宗学』の三誌掲載論文のデータ入力を終了した。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

チーフ・教授 ロバート F. ローズ
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。本年度も英語班、ドイツ・フランス班、中国班の三班に分かれて研究活動を進めてきた。各班の研究経過の概要は以下の通りである。

〈英語班〉

I. 翻訳研究活動

(1) *An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings* について
6月15日(月) 16:00~18:00 英訳出版に向けて最終的な打ち合わせを行った。

於：真宗総合研究所内ミーティングルーム

編集及びSUNY出版との仲介を担当して下さっているマーク・プラム嘱託研究員（ニューヨーク州立大学）、翻訳を担当されたポール・ワット嘱託研究員（デポー大学）、前研究補助員のマイケル・コンウェイ助教を交えて、出版までに必要な書類手続き、図版写真の選択等の細部について打合せ確認を行った。その後、その確認に沿って翻訳許可・写真図版使用許可などの書類とデータを揃え、原稿をSUNY出版に送った。これで来年度の7月頃までにはSUNYと正式な契約書を交わし、来年度中に出版できる見通しがついた。

(2) 佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究について

昨年、近代教学アンソロジーに続くプロジェクトとして、佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」を翻

訳することが決定された。その翻訳研究会を以下の日程で行った。

- 第1回研究会 5月12日 17:00~19:00
- 第2回研究会 6月23日 17:00~19:00
- 第3回研究会 7月14日 17:00~19:00
- 第4回研究会 8月4日 16:00~18:00
- 第5回研究会 9月15日 17:00~19:00
- 第6回研究会 10月20日 17:00~19:00
- 第7回研究会 11月17日 17:00~19:00
- 第8回研究会 12月15日 17:00~19:00

本年度は、8回の研究会で全体の五分の三まで英訳が進んだ。来年度も継続して翻訳を終わりまで行い、改めて全体を通じた編集校正を経て、公開できるところまで進める予定である。

II. 学会参加

6月12日(金)~14日(日)龍谷大学大宮学舎において「21世紀の世界と浄土真宗—その課題と可能性」というテーマで開催された第14回国際真宗学会学術大会に研究員・嘱託研究員・研究補助員が参加した。

今回は研究班としてパネル発表は計画できなかったが、山高秀介研究補助員が個人発表し、マーク・ブラム嘱託研究員は当研究所の『教行信証』(坂東本)の共同研究によるパネルに参加して発表を行った。他の研究員・補助員は研究発表を聴講し、大会・懇親会を通じて、海外の真宗研究者と交流を深めた。

大会最終日の総会で次回2011年度の学術大会を、親鸞の750回御遠忌を記念して再び京都で開催することが決定された。その後の日本地区理事による会合において、日本地区の関係大学共同開催の形で、大谷大学が会場校に決定した。その期日・テーマ等の詳細については、今年度末3月30日の日本地区理事会で決定される予定である。

III. 公開講演会の開催

来日した海外の研究者を中心に、以下のような5回の公開講演会を開催した。

- (1)7月2日(木) 16:10~18:00

於：マルチメディア演習室（響流館3階）

講師：Kósa Gábor 氏

（エトヴェシ・ロラード大学准教授）

題目：中国マニ教聖典にみられる仏教語彙

- (2)9月14日(月) 16:10~18:00

於：マルチメディア演習室（響流館3階）

講師：羽田 信生 氏

（国際仏教研究嘱託研究員・毎田周一仏教セ

ンター所長）

題目：三願転入と米国における真宗

- (3)9月29日(火) 16:10~18:00

於：マルチメディア演習室（響流館3階）

講師：辛島 静志 氏

（創価大学・国際仏教学高等研究所教授）

題目：仏教文献学と仏教思想史研究：

初期大乘仏典の文献学的研究

- (4)11月26日(木) 14:30~16:00

於：マルチメディア演習室（響流館3階）

講師：William Waldron 氏

（ミドルベリー大学教授）

題目：脳は孤立した島ではない：

宗教経験の間主観的な構築をめぐる仏教と認知科学の対論

- (5)12月17日(木) 14:30~16:00

於：マルチメディア演習室（響流館3階）

講師：Jean-Noël ROBERT 氏

（EPHE・ソルボンヌ大学教授）

題目：仏教研究におけるフランスと日本の協力

IV. その他

国際研が収集した図書の整理・公開については、図書館と連携して作業を継続中である。国際研関係洋書データベースの公開については、次年度を期す。英語班のホーム・ページ構築についても、引き続き準備の段階にあり、来年度に継続して行う。

〈ドイツ・フランス班〉

1. フランス国立高等研究院（EPHE）との合同シンポジウムを2010年5月5、6日に実施し（於パリ）、担当の研究員が各自発表した。このシンポジウムは、2006年に開催された大谷大学真宗総合研究所とEPHEの合同シンポジウム「宗教と近代合理的精神—一日仏文化の比較をとおして」（於大谷大学）に続くかたちで開催されるものであり、2回目である今回のシンポジウムは、「ナショナル・アイデンティティと宗教—フランスと日本—」が全体のテーマとして掲げられている。
2. マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシュ教授の著書*Martin Luther: Eine Einführung, Zweite Auflage*（『マルティン・ルター入門』第2版）の翻訳作業を進めている。2009年3月にマールブルク大学神学部で開催されたシンポジウム“Martin Luther—Biographie und Theologie”（マルティン・ルター—その生涯と神学）に村山保史研究員と藤枝真研究員が参加した際に、村山

保史研究員と藤枝真研究員がコルシユ教授と面談をし、翻訳に関する打ち合わせを済ませている。翻訳終了次第、出版という形での公表を計画している。

〈中国班〉

研究テーマ：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化

I. 大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の資料一覧作成

すでに調査が終了した中国東北地域に引き続き華北地域関連の綴資料(仮番号19~25)および華中地域関連の綴資料(仮番号26~)の目録作成作業を継続している。

II. 中国東北師範大学との共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

1. 2009年7月6日(月)~13日(月)、曲曉範東北師範大学教授、胡赤軍東北師範大学副教授を招聘し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松川節研究員、木場明志本学教授、広川佐保囑託研究員とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

7月10日(金)16:10~18:30

(於：響流館3階 マルチメディア演習室)

○日本佛教徒小栗栖香頂北京留学、上海開教活動與近代中日文化交流:1873-1876

東北師範大学歴史文化学院 曲 曉範 教授

○戦後中国政府和人民对東北地区日本僑民的遣返和安置

東北師範大学歴史文化学院 胡 赤軍 副教授

2. 2009年8月27日(木)~9月1日(火)、浅見研究員、松川研究員、王奕明研究補助員、木場本学教授、広川囑託研究員の五名は、中国北京市、内モンゴル自治区赤峰市(赤峰市区・巴林右旗・巴林左旗)において、モンゴル仏教及び華北仏教の研究調査、特に映画「蒙古横断」の撮影当時(1925年)と現在との比較調査・研究を実施した。

III. 中国社会科学院歴史研究所との共同研究の推進

1. 本学与中国社会科学院歴史研究所との研究協定締結に先立ち、2009年12月14日(月)~20日(日)、オユンゴア中国社会科学院歴史研究所副研究員、博明妹助理研究員を招聘し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松川節研究員とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

12月18日(金)16:10~18:00

(於：響流館3階 マルチメディア演習室)

○朝鮮司訳院の蒙学訳官について—訳官の養成と語学力を中心に—

中国社会科学院歴史研究所 オユンゴア副研究員

○中国東北のエウエンキ族について

中国社会科学院歴史研究所 博明妹助理研究員

2. 本学与中国社会科学院歴史研究所との研究協定締結のため及び研究調査のため、2010年3月6日(土)~3月10日(水)、浅見研究員、桂華研究員の二名は、中国北京市・天津市において、華北仏教の研究調査を実施した。

3. 本学与中国社会科学院歴史研究所との研究協定により、2010年3月12日(金)~21日(日)、オユンゴア中国社会科学院歴史研究所副研究員、聶静潔助理研究員を招聘し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松川節研究員とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

3月19日(金)15:00~17:00

(於：響流館3階 マルチメディア演習室)

○ハンゲル制定におけるパスパ文字の影響

中国社会科学院歴史研究所 オユンゴア副研究員

○『悟空入竺記』版本研究

中国社会科学院歴史研究所 聶静潔助理研究員

西藏文献研究

チベット語文献の データベース化

チーフ・教授 福田 洋一
(仏教学)

本研究は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、2009年度は、以下の課題に取り組んだ。

- 1) 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化、電子テキスト化
 - a. 『ミラレーパの十万歌』(菊池法純氏寄贈蔵巴梵語文献所収の木版本を底本とし、青海民族出版社本の異同データを含むテキストデータ)入力・校正を完了した。
 - b. 『チベット語訳大唐西域記』および『シェン・ニマ伝』のテキストデータをWebページ上に公

- 開した。
- c. 北京版カンギュル所収テキストの奥書データの校正を完了した。
 - d. 将来の入力・校正作業にそなえるために図書館所蔵の稀観本『サンブ寺歴代座主記』、『目連救母経』、『入中論註』のデジタル写真撮影をおこなった。
 - e. 公開済のテキストデータを検索するためのKWIC (keyword in context) 開発 (人文情報学科福田ゼミの卒業論文テーマ) に協力した。
 - f. 北京版オンライン目録とデルゲ版PDFデータをリンクさせたシステム開発 (人文情報学科福田ゼミの卒業論文テーマ) に協力した。
- 2) OUTLK (Otani Unicode Tibetan Language Kit) のサポート
- a. 嘱託研究員・野村正次郎氏をアップル社主催のWorldwide Developers Conference (世界開発者会議、サンフランシスコ、6/4~6/17) に派遣。アップル社の担当者とヴァージョンアップ等について協議した。また、嘱託研究員・ステイーブ・ハートウエル氏と既存フォントのOpenType化作業をおこなった。
 - b. 『ダラニ集 (gZungs 'dus)』精査の結果、現状のOUTLKでは出力 (表示) されない20種程度の組み合わせに対するフォントを作成した。
- 3) 共同研究
- a. チベットの伝統美術に造詣が深く、また、Unicodeに対応したチベット文字フォントの開発をおこなっているインド在住亡命チベット人学僧ロブサン・モンラム師を招聘した (10/11~11/8)。チベット文字フォント開発のための技術交流をおこない、3種のMacintosh用AATフォントを作成した。また、チベット美術に関する公開研究会を開催した (11/4)。
- 4) 寺本婉雅資料の研究
- a. 村岡家より借用中の手紙についてはリスト作成済。博物館の要請を受けて資料の一部を2009年度秋期企画展「南條文雄と近代仏教学」に提供、解説を執筆した。
- 5) その他
- a. チベット文献学関係の公開研究会を3回開催した (11/4、12/15、1/26)。

- b. メールマガジンを発行し、本研究班の有する学術情報や公開研究会の案内を発信した。
- c. 研究員・三宅伸一郎を第6回国連ウエーサクの日・国際仏教徒会議 (International Buddhist Conference on the United Nations Day of Vesak Celebration) の会期中の5月5日に開催された電子化推進ワークショップ (Electronic Initiatives Workshop) に派遣した。

大谷大学DB研究

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル映像化

チーフ・教授 宮下 晴輝
(仏教学)

大谷大学DB研究班 (以下、本班と略す) では、大谷大学の所蔵する貴重な学術的資産ならびに真宗関係文化財のデジタル・データベース化に取り組んでいる。本作業の中心課題は、学術資料として十分な精度の保持の検討と、その提供を可能とする全学的な視野からの検討とその具体的な実施、および公開方法についての検討である。これらの実現には全学的な取り組みが不可欠であるため、本班研究員・嘱託研究員はもとより、学内外の協力や助言などを頂きながら各作業を進めている。

2009年度上半期において本班は、所期の目的を達成するために以下の作業を行ったことを報告する。あわせて、2010年度の研究計画を記す。

【1. 北京版チベット大蔵経のデジタル化】

(1) オリジナルのデジタル化

本学が所蔵する北京版チベット大蔵経のデジタル・データ化とその公開は、本学所蔵の貴重資料の中でも、学内外より強い要望があるもののひとつである。以下に2009年度の本作業の活動状況を報告する。

作業準備として、(1) デジタル化対象資料の選定、(2) 写真撮影のための機材決定と一部購入、の2点を行った。当該資料は大量であるため、学術的な利用頻度に従い、作業優先順位を設定せざるを得なかった。

作業内容として、これらの作業準備をふまえ、日本学術振興会平成22年度科学研究費補助金の研究成果

公開促進費「データベース」部門に申請した。

2010年度への課題として、(1)データ公開のためのデータ形式の研究及び公開システムの研究、(2)試験的に学内公開するためのPC及びデータ・ストレージ機器の選定と購入、(3)最適な撮影場所の確保、の3点があげられた。

なお、本項中に掲げた科学研究費補助金申請は、2010年度に採択通知を受けたことを付記する。

(2)マイクロフィルムのデジタル化

本学が所蔵する北京版チベット大蔵経マイクロフィルムは、一次資料の代替資料としての学術利用と、それ自体が充分に貴重であるフィルム資料の保存という、相反する要求の狭間にあって、経年劣化防止が難しい状況にある。本班では、学術利用に供するためにマイクロフィルムのデジタル・データ化を進め、あわせてマイクロフィルムの保存のために最適な手法を調査している。以下に2009年度の本作業の活動状況を報告する。

作業準備として、最適なマイクロフィルムリーダー1台を購入した。これと既存のWindows PCを接続し、PDF形式で外部記憶装置に出力・保存する作業手順を確立した。

作業内容として、(1)読み取り対象資料の選定、(2)マイクロフィルムのデジタル・データ化、(3)マイクロフィルム保存のための基礎データとしての状態記録、の作業工程を確立した。なお、総数186本のマイクロフィルムに対しマイクロフィルムリーダーは1台であり、向後数年にわたる作業が予想される。このため、学術的な利用頻度に従い、読み取り優先順位を設定せざるを得なかったことを付記する。

作業成果として、2009年1月現在、テンギュル中、般若部・中観部・諸経疏部・唯識部・阿毘達磨部・律疏部・本生部のデジタル・データ化が完了した。

2010年度への課題として、(1)マイクロフィルムの劣化について進行速度を抑制する手法の検討、(2)本学ネットワークOUNETへの接続とデータ公開に向けた実験、(3)データ公開実験のための人員確保、の3点があげられた。

【2. パーリ語貝葉写本のデジタル化】

本学所蔵のパーリ語貝葉写本は、大量であるためにデジタル・データ化の優先順位をつける必要がある。デジタル・データ化作業は、まず優先順位をつけるために資料の内容把握を行い、次に必要と判断した文献に対しデジタル・カメラによる写真撮影とTIFF形式による外部記憶装置への保存を、半期毎に行ってい

る。以下に2009年度の本作業の活動状況を報告する。

デジタル・データ化として、大谷貝葉のうち稀観文献約10套70pūhū (束)を完了した。

文献の抽出作業として、タイの由緒ある寺院の経蔵における所蔵文献の実態調査を2010年2月5日より20日まで行った。これにより、写本のままでしか存在しない文献が明確となり、デジタル化の必要性がより高い文献の抽出が可能となる。

また、情報収集ならびに意見交換のために、学会への参加を精力的に行った。

- (1)パーリ学仏教文化学会 (5月29日(金)、30日(土)) なお、本件は真宗総合研究所所報No.55にて報告済である。
- (2)国際仏教学大学院大学講演会 (10月9日(土)、ピーター・スキリング博士 "Sakyamuni sets out on the path: Four non-classical Pāli Jātakas from Siam").
- (3)東方学会に参加 (11月6日(金)、7日(土))。

2010年度への課題として、(1)学術資料として供するに値するデジタル・データとしての精度を一層高めるための各種ソフトウェア購入の必要性、(2)デジタル・データ化対象となる稀観文献の抽出作業の促進、の2点があげられた。

【3. 真宗関係文化財のデジタル・データ化作業】

(1)高谷氏所蔵の横山写真館資料のデジタル化

真宗関係画像文化財のデジタル・データベース化作業として、高谷氏より提供を受けた横山写真館資料の目録製作に取り組んでいる。以下に2009年度の本作業の活動状況を報告する。

作業準備として、目録製作に必須の資料分類と作業用リスト作成を完了した。

作業内容として、作業用リストに基づくデジタル写真撮影に着手した。同時に、作業用リストをデジタル写真とリンクさせ、最終的な目録作成に着手した。

2010年度への課題として、目録の完成を目指す。

(2)安田理深の講義カセットテープのデジタル化

真宗関係音声文化財のデジタル・データベース化作業として、学仏道場相応学舎より提供を受けた安田理深の講義を録音したカセットテープのデジタル・データ化に取り組んでいる。以下に2009年度の本作業の活動状況を報告する。

作業準備として、(1)デジタル化の作業工程の明確化、(2)デジタル・データ化のための既存機器調査と必要機器調査、の2点を行った。作業工程は5段階に分類し、うち本年度は第1段階であるデジタル化のための基礎調査を完了した。

作業内容として、資料整理については、カセットテープは総数87本であり、うち『撰大乘論』が51本、内容不明が36本であることを明らかにした。機器調査については、デジタル・データ化に必要なハードウェア及びソフトウェアはいずれも10年前のものであり、そのすべてに何らかの不具合や動作不良が発見された。

2010年度への課題として、(1)デジタル化可能な機器整備を行うこと、(2)第2段階のデジタル・データとしての保存、の2点があげられた。

真宗本廟（東本願寺）造営史研究

真宗本廟（東本願寺）造営史料の研究 ならびに『本願を受け継ぐ人びと—真 宗本廟（東本願寺）造営史—』の編纂

チーフ(代行)・准教授 平野 寿則
(日本近世史・仏教史)

「真宗本廟（東本願寺）造営史研究」は、2011年の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の記念事業の一環であり、真宗本廟（東本願寺）造営の歴史を信仰史・教団史はもとより、建築史・技術史・美術工芸史・防災史など多角的な視座から研究するものである。徳川家康よる京都東六条の寺地寄進を受け、阿弥陀堂・御影堂が創建された東本願寺は、その後、寺地の加増寄進と明暦の大改築を経て「都富士」と称される大伽藍が完成した。ところが、江戸時代を通じて4度の焼失に遭遇し、そのたびごとに再建を果たしてきた。ここでは、その度重なる造営を支えた門徒を「本願を受け継ぐ人びと」と意味づけ、その懇念のあらわれである資材・労力・資金の提供と、大工・職人・工匠等の諸技術の結集によって壮大な伽藍を形作ってきた経緯を研究し、かつ一書にまとめようとするものである。

東本願寺には、創建時以来の造営関係資料6000余点が現存する。本研究では、門徒の信仰を基軸に、こうした歴史・建築・技術・美術工芸等に関わる諸資料を整理・分類し、その分析・考察を通して真宗本廟造営史の全体像を構成していく。今回の成果報告書『本願を受け継ぐ人びと』が、真宗本廟造営の特質を明らかにするものであると共に、他の一般研究に寄与することを期したい。

以下では、昨年度の具体的な研究活動と経過について、研究推進計画として掲げるⅠ. 造営史の全体像の把握、Ⅱ. 資料調査、Ⅲ. 文書翻刻、Ⅳ. 国内資料調査、Ⅴ. 研究会、の各項目に基づきながら、順次に進捗状況を報告する。

Ⅰ. 全体像の把握では、江戸期造営については、造営再建ごとに、関連諸資料の収集・整理・分類、写真撮影・史料翻刻を通じて、また明治度造営については、『東本願寺・明治造営百年』や本山機関紙の整理・図表化をおこない、全体像の把握に努めてきた。その全体像については、歴史・信仰・建築などの各視点から、以下のように整理・提示することができる。1、真宗本廟建築の信仰空間 2、東本願寺創建以前の真宗本廟 3、真宗本廟御影堂の造営 [1]. 真宗本廟（東本願寺）造営と御影堂 2). 明治再建の道すじ 3). 門徒の尽力—地域の記録— 4). 明治造営のその後と教学振興]。

Ⅱ. 資料調査については、本学図書館および博物館所蔵の関連諸資料の抽出・写真撮影がおこなわれた。合わせて、東本願寺故法主殿御葬式之図（明治27年）、「大谷派本願寺上棟式細絵図」（明治22年）「大谷派本願寺御堂再建真影之図」（明治22年）「大谷派本願寺再建図」（明治22年）など必要史料を購入した。

Ⅲ. 史料翻刻については、造営・焼失・再建の全般的な動向と、その具体的な様子を把握するために、東本願寺資料をはじめ、他機関所蔵の関係資料の全文翻刻または関連記事の抄出翻刻が継続して進められている。以下、翻刻を完了した諸資料の一部について、所蔵機関別に列挙すれば、次の通りである。

【大谷大学図書館所蔵】

『東本願寺再建被掛候御届一件』『御堂日記（略抜）』『御影堂棟上記』『東本願寺御堂御遷座之記』『元治大変法用記』『天明元治御類焼之記』『東本願寺焼失二付心得之事』『本山回録塗聴記』『万延元年仮御堂御遷座并供養』

【大谷大学博物館所蔵】

『大谷御廟地於江府御願書之覚』『本願寺由緒略記』『七條鏡』『寛文十年本堂御遷佛記』『嫡庶問答七條鏡』

【東本願寺所蔵】

『寛政元年記録』『寛文元年御影堂遷座記録写本』『再建二付本堂須弥壇等記録』『本堂再建催、地築等記録』『御焼失二付諸国御回状留』『陽明家へ本山堂宇再興に付下間頼功他五名倫旨内願口上書控』『御材木御拝領並日ノ丸御船印御納借且門下二付浦触等御願立一件書抜』『粟津元隅日記寛文六年阿弥陀堂再建一件抜書』『御影堂御遷座記録』『御影堂新初記』『諸向午年

迄御手続書』『寛政度本堂再建記録』『本願寺坊官口上覚』『小屋組・足代・御柱建・御畳・御棟上記録』『公儀掟書・裁許書・仰渡留書写』『再建二付本堂須弥壇等記録』『御作事日記』(計16冊)

『天明八年・文政七年本山焼亡に関する法主文献等』『寛政度御再建御殿廻り御絵様並画工附』『堂閣作事公儀御條目之写』『御再建二付日記』『御影堂棟上記』『東本願寺御堂御遷座之記』『枳殻御殿古之記録』『粟津元隅日記寛文六年阿弥陀堂再建一件抜書』

Ⅳ. 国内資料調査では、昨年12月および本年3月の二度にわたり、長浜別院大通寺の建築・資料調査を、また本年2月には、姫路市立城内図書館において献木用材回漕に関する資料調査を、さらに本年3月、青木馨氏宅(愛知県碧南市)で東本願寺造営史に関わる文献や図面類の調査と写真撮影を実施した。こうした国内資料調査は、東本願寺資料を客観的に裏付けるための調査であるとともに、地域に残る関連諸資料の発掘・収集を通じて、「本願を受け継ぐ人びと」の諸相と造営史全容のさらなる理解に努めるものである。

Ⅴ. 研究会については、公開研究会と個別課題の報告会を定期的実施してきた。公開研究会は、嘱託研究員を中心に3回開催したが、多数の貴重なご意見を頂戴することができた。また最後の会には、4年間にわたる研究活動の総括と、『本願を受け継ぐ人びと』の出版にけて、執筆・編集に関する確認を行った。

第11回目：櫻井敏雄氏(講題「御坊格寺院本堂の建築的構成—その空間と意匠—」)

伊藤延男氏(講題「本願寺寺内、境内の位置と大きさの変遷—吉崎から京都まで—」)

第12回目：八木清勝氏(講題「平成の御影堂修復を通じて明らかになった事について」)

第13回目：安藤 弥氏(講題「大坂本願寺の隆盛」)

また個別課題の報告会では、それぞれの執筆に向けて、再建造営の諸問題が順次に取り上げられ、議論が深められると共に、全体構成の調整・検討が行われた。

最後に、本年度の研究計画を示せば次の通りである。主たる作業は報告書原稿の整理と全体の調整であり、門徒の信仰を基軸とした真宗本願造営の歴史を、建築・技術・美術・工芸・防災といった特質をふまえて編集に意を尽くしていきたい。また、実際には関連諸資料の補足調査、翻刻史料の確認作業が最後まで継続される。余すところの月日を有効に使って、報告書『本願を受け継ぐ人びと—真宗本願(東本願寺)造営史—』編纂作業の完成を鋭意に進め、真宗門徒の帰依処としての存在意義を確認していく。

本研究は、2009年度をもって4年間にわたる調査・研

究活動を終了することになった。本年度(2010年度)は、今までの研究成果に基づいて、研究成果報告書『本願を受け継ぐ人びと—真宗本願(東本願寺)造営史—』の編集作業が中心となる。各執筆から提出された原稿の整理、引用・典拠資料の確認、掲載諸資料・図版の選定などの編集作業を進め、報告書全体の編年史的叙述の整合性を図りながら編纂作業に全力を尽くす。具体的には、まず編集事務局を立ち上げて、4月以降、執筆原稿及び資料・図版などの全体的調整を行い、合わせて報告書の仕様・出版社をほぼ決定し、漸次、入稿した原稿の調整を図っている。9月以降は、記名原稿に関しては執筆校正を2回おこない、通史原稿については、編集委事務局において随時に校正・全体調整を図って12月の校了を目指す。また、造営史関連諸資料の調査・研究を継続し、執筆・編集に必要な情報を提供して編纂作業を補完する。

本研究は、本学以外から各専門分野の嘱託研究員に多大な協力を得てきた経緯があり、今後とも編纂作業に参加して戴き、意見を賜りながら、『本願を受け継ぐ人びと』の完成に努めたい。

真宗同朋会運動研究

真宗同朋会運動の歴史と現状を「聞き書き」を通して把握し、その現代的意義を明らかにする

チーフ・教授 水島 見一
(真宗学)

本研究は、2年後に50周年を迎える真宗大谷派教団が提唱した信仰運動である同朋会運動の全貌を、「群萌における求道と獲信」という切り口から明らかにしようというものである。

「群萌における求道と獲信」とは、具体的に「門徒」として生活されている方々に、インタビュー(真宗の伝統において、「聞き書き」と称される手法がある)をし、ご自身の求道と、真宗の教法との出遇いを話して頂く。それを、成文化し、社会学的な見地から分析していく。つまり、実際に、真宗の門徒の方々から聞くことによって、同朋会運動という宗門(上)からの施策が、実際どのように門徒(下)に浸透し得たか、ということを明らかにすることで、同朋会運動の実情を浮

き彫りにしていくことを目的としている。

本年度は、引き続き「聞き書き」調査を展開するとともに、昨年度調査した方々へのフォロー調査を実施する。そのことを通して、「聞き書き」内容の精度を高めていく。

本年度は現在までに「聞き書き」調査を、全国各地の約10名の方々に実施している。その詳細については、個人情報のため割愛させていただく。本調査を通して、「門徒」の方々が必ず言われたご意見としては、実際に生活の場に生きた「声・願い」に着目した研究を長年切望されていたことである。この事実は、本研究を進めるにあたり、大きな力をいただいた。また同時に、実際の生活の場に目を向けた研究の重要性を確認したことである。

また、本研究のもう一つの方向として、各方面の有識者の方々からご意見を頂くことによって、同朋会運動を教団外の視点から見つめ、社会的に位置づけ、親鸞思想の現代的意義、乃至は親鸞思想の可能性を、明らかにすることを目的としている。

本年度は、現在までに以下のとおり、2回の公開研究会を行っている。今後も、さらに行っていく予定である。

《公開研究会》

2010年5月20日 於 学内：マルチメディア演習室

●上田閑照先生

上田先生には、「清沢満之とは誰か ～当時において、そして現在の私たちにとって～」と題して、御講演をいただいた。その中で、「清沢満之」の信念の特徴を、「修養と他力の信念との反復」という視点で確認していただいた。そのことが現代に生きる私たちにとって、いかに具体的で重要な意義をもっているかという提言をいただいた。

2010年7月22日 於 学内：マルチメディア演習室

●亀井鑽先生

亀井先生は、長年生活に基づいた真宗への学びをしてこられた方である。その視点から「真宗同朋会運動について ～そのあゆみと今後の展開～」と題して、御講演いただいた。その中で、具体的な日常のエピソードを通して、「生きた真宗」の具体相をお話しされた。そして真宗の学びが、実践と深く結びつくことの意義を語っていただいた。

また、今後の真宗を担う若者たちへの熱いメッセージを伝えていただいたことである。



(前列左から) 田口タズ子さん・大村迪男さん
(後列左から三人目) 石橋令子さん
於 田口宅 2010年7月6日撮影

2010(平成22)年度「一般研究」(追加)研究組織一覽

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
【2010～2011年度科研採択】 一般研究(西川班)	研究課題 貧困に対する活動と社会的レジリエンスの社会学的研究—シカゴ学派からの展開と実践 研究代表者 西川知亨(本学任期制講師)
【2010～2011年度科研採択】 一般研究(清水班)	研究課題 タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究 研究代表者 清水洋平(本学非常勤講師・特別研究員)

※2010(平成22)年度日本学術振興会科学研究費補助金(研究活動スタート支援)の採択により、2010年8月25日付発令。委嘱期間：2010年8月25日～2011年3月31日(但し、研究期間：2010年8月25日～2012年3月31日)

2009(平成21)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

石刻史料からみた宋元時代 華北地方における仏教の 社会史的変遷に関する基礎研究

研究代表者・教授 桂華 淳祥
(東洋史学)

本研究は、宋元時代の華北地方における仏教と社会との関わりの歴史の変遷について、複数の研究者の参加を得て、中国史の視点に加え、当時華北を領有していた遼・金・元といった異民族の支配体制や、朝鮮半島および日本との交渉など周辺の諸民族あるいは地域との関係という視点から、仏教関係石刻史料の蒐集と整理を中心として問題分析を行って当該研究の基礎データを充実させることを第一の目的とする。

具体的な活動としては、まず既存および最近刊行された石刻史料集に収録される当該時代の河北・河南・山東・山西各地域の仏教関係石刻史料の検索を進めつつ、研究班員を中心として会読を行い、上記作業で得られた碑刻について、その内容を検討して重要と思われる記事を抽出している。

会読は月に1回のペースで行い、「六聘山天開寺懺悔上人墳塔記」遼・大安五年(1089)、「馬鞍山故崇祿大夫守司空傳菩薩戒壇主大師遺行碑銘并序」大安7年(1091)、「琬公大師塔銘」大安9年(1093)、「大遼國燕京

永泰寺崇祿大夫檢校太尉傳菩薩戒懺悔正慧大師遺行靈塔記」遼・天慶6年(1116)、「傳戒大師(悟敏)遺行碑」金・天德4年(1152)、「善照(懷鑒)禪師碑」金・大定9年(1169)「廣温和尚碑銘」大定9年(1169)「中都竹林寺第7代了奇和尚塔」大定19年(1179)「政言禪師塔銘」大定19年(1179)「相了禪師塔銘」泰和4年(1204)などについて検討した。このような史料の解読によって仏教活動に関する既知の史料の確認が出来たほか、遼から金に至る華北の各地域社会における活動の実態、例えば僧の師弟関係に代表される人的な繋がり、あるいは彼等によって継承される教義的な繋がりを示す記事なども見出せた。なかでも竺沙雅章先生のご教示のもと、新出史料である金代の僧の塔銘の記事から、従来空白とされてきた金朝治下における臨濟宗の活動の実態が浮かび上がってきたことは特筆に値しよう。また今年度後半には京都滞在中の中国社会科学院歴史研究所の劉曉研究員にも研究会に参加して頂いた。これによって中国における最新の研究動向をも踏まえた論議を進めることができ、本研究活動をさらに進展させるための糧となった。

今一つの活動は現地調査である。これには2009年11月13日(金)から2009年11月19日(休)にかけて中国河北省にて実施し、定州開元寺塔院・定州市博物館・石刻館(定州市)、正定開元寺・臨濟寺・隆興寺・鹿泉韓庄龍泉寺(石家庄市)、邢州開元寺、天寧寺、淨土寺、平郷文廟(邢台市)、開化寺(元氏県)、柏林寺(趙県)、北岳廟、修德寺(曲陽県)などで現状の調査を行い、それぞれに現存する碑刻を実見し記録した。その中で柏林寺(趙県)の「慈懿和尚舍利之塔」天会12年(1134)、「特賜大元趙州古仏真際光祖國師之塔銘」至順元年(1330)、隆

興寺（石家庄市）の「真定大隆興寺功德記」憲宗9年（1259）、「隆興寺重修大覚六師殿記」大徳5年（1301）、「皇元真定府隆興寺重修大悲閣碑」後至元元年（1335）、「隆興寺通照大師碑」至正6年（1346）など、金・元時代のものについては、従来の録文の欠を補うなど本研究に有用な史料が得られた。また隆興寺の「恒州刺史鄂国公勸造龍藏寺碑」隋・開皇6年（589）、「重修鑄鎮州隆興寺大悲像並閣碑銘序」宋・端拱2年（989）、「開元寺三門樓石柱」唐・大暦12年（777）など、隋・唐・宋代の碑刻も見られ、各寺院の歴史の連続性を窺い知ることができた。

なおこの調査に先立ち、初日には起点となる北京に到着後、中国社会科学院歴史研究所において我々の研究活動について報告をして意見交換を行うとともに、調査予定地に関する情報の提供を受けた。そのみならず調査予定地の研究機関に事前に連絡を取り便宜をはかって頂けたことで調査活動をより円滑に進めることができた。感謝したい。また最終日には再び中国社会科学院歴史研究所の研究員諸氏と懇談し、相互に保有する関係史料の提供など今後の研究協力を約した。

このように準備段階を含めた現在までの活動は石刻史料を中心とした史料の蒐集であるが、それによって従来の研究では史料が乏しいことから空白の時代として扱われてきた当該時期華北仏教界の動きを跡付けるための基礎データを得つつある。またその成果の一端も現れてきている。

幸いに本研究は平成22年度までの予定で日本学術振興会より科学研究費補助金が交付されることとなったので、上述のような方法にて史料の蒐集を続行し、さらに最新の情報も含めて検討を進め、華北全域さらには周辺地域にまで及ぶ詳細な状況の把握に努めたい。

共同研究

『教行信証』(坂東本)の 総合研究のための基盤構築

研究代表者・教授 加来 雄之
(真宗学)

【研究概要】

本研究班は、標記の研究課題のもと『教行信証』(坂東本)についての共同研究を行った。「基盤構築」とい

う研究課題の性格と、また一年間という限られた期間であったこともあり、『教行信証』(坂東本)を総合的に研究するうえで、どのような課題設定が可能か、またどのような解釈方法が有効か、など総合的研究に向けての可能性を、さまざまな分野から、探ることが中心となった。

そもそも『教行信証』(坂東本)とはどのようなテキスト(文献)なのか。そのテキストとしての特徴が、『教行信証』研究、もしくは親鸞思想の研究、中世日本仏教の研究においていかなる方法論的な意義を有しているのだろうか。先学の研究によって知られるように『教行信証』(坂東本)は、真筆本かつ手沢本という貴重な文献的特徴を有しており、その中には親鸞思想の原点と展開を示唆する情報が埋蔵されている。その意味で、『教行信証』(坂東本)は、さまざまな親鸞の思想解釈の可能性、そのみならず親鸞が生きた日本中世仏教の実態を解明するための情報を含んだ鉱脈である。おそらく、この鉱脈からは無数の鉱石を掘り出すことができるであろう。しかしすぐれた鉱石も利用するためには製錬する技術が不可欠であるように、文献的特徴に彩られたさまざまな思想の営みが『教行信証』(坂東本)に記録されているとしても、それらはそのままでは原石でしかない。つまり『教行信証』(坂東本)から親鸞の思想的営みと課題を抽出するためにはぜひとも製錬の方法が必要である。それは同時にこれまでの『教行信証』研究の歴史を検証し、そのなかから不純物(『教行信証』の本質を隠してきたかもしれないある種の研究的手法、たとえば時代的風潮を反映した構造的理解(科文)や「西・鎮・今」というような宗派イデオロギーによる比較研究など)を取り除くという精練という作業も含むことになる。私たちの『教行信証』研究や『教行信証』の文献的特徴への注目(固執)が、そのような負の役割を果さないとはいえないからである。

『教行信証』(坂東本)の文献的特徴が有する思想的意義を明確にするために、私たちは、『教行信証』(坂東本)を方法論的概念として鍛え上げなくてはならない。しかし『教行信証』(坂東本)の文献的特徴を方法論的概念にまで製錬するためには、どのような手続きが必要なのであろうか。先述したように文献的特徴が分っただけでは方法論として用いることができない。文献的特徴がどのように思想的解釈に有効なのか、もしくは有効でないのかを検証する必要がある。そもそも中世日本の宗教文献を読むとは、とくに『教行信証』(坂東本)を解釈するとはどのような営みであるべきなのであろうか。われわれは研究の立場や方法論の点検から出発しなくてはならない。

本研究班では、『教行信証』(坂東本)研究の課題と可能性を探るという課題のもと、真宗学をはじめとする諸分野の研究者による研究発表を行った。その目的は、発表を通して『教行信証』(坂東本)を読解し解釈する上での方法的問題を共有することであった。以下に紹介する研究発表は、本研究班の研究員および研究班が依頼・招聘した研究者が、共同研究の一環として学術学会、公開研究会および研究員による共同研究研究会において行ったものである。

- ①2009年6月10日(於大谷大学) 共同研究研究会
加来雄之(本学教授・研究員)「『教行信証』(坂東本)の総合研究に向けての基盤構築」共同研究に向けて」
- ②2009年6月14日(於龍谷大学) 国際真宗学会
Panel 3 “Possibilities and Problems in Kyogyoshinsho Research”
Coordinator: Michael Conway (Otani University)
1. “The Work of Self-Attestation: The Problems and Possibilities of a Structural Understanding of the Kyogyoshinsho” (“己証といういとなみ—『教行信証』の構造的な理解における課題と可能性)”)
Takeshi Kaku (Professor of Otani University・本学教授・研究員)
 2. “A Double Take on History: The Degeneration of Buddhism and Historicity of Salvation in the Kyogyoshinsho”
Michael Conway (Otani University)
 3. “On the Significance of Shinran’s Holographic Version of the Kyogyoshinsho in English Translation”
Masafumi Fujimoto (Lecturer of Otani University・本学専任講師・研究員)
 4. “Reading the Kyogyoshinsho Through the Lens of the Nirvana Sutra: a thattagarbha understanding of a evil person”
Mark Blum (Professor of the State University of New York at Albany)
- ③2009年7月5日(於大谷大学) 真宗大谷派真宗教学大会
加来雄之(本学教授・研究員)「『教行信証』における「浄土」と「仏土」という課題」
- ④2009年7月22日 共同研究研究会
藤元雅文(本学専任講師・研究員)「『教行信証』(坂東本)の具体的特徴①—高田本、西本願寺本との比較を通して—」
- ⑤2009年9月8日(於大谷大学) 日本印度学仏教学会第60回大会
加来雄之(本学教授・研究員)「伝承と己証—『教行信証』の構造論における課題と可能性」
- ⑥2009年9月9日(於大谷大学) 日本印度学仏教学会第60回大会
パネル発表「『教行信証』研究の可能性」
- 1 加来雄之(本学教授・研究員)「『教行信証』研究の課題と可能性」
 - 2 三木彰円(本学専任講師)「『教行信証』坂東本の性格と課題」
 - 3 織田顕祐(本学教授・研究員)「大乘仏教の日本的展開と『教行信証』の要務」
 - 4 延塚知道(本学教授)「大乘の至極—往生浄土から大般涅槃道へ—」
 - 5 長谷正當(本学元教授)「『教行信証』と「回向」の問題」
- ⑦2009年9月30日 共同研究研究会
加来雄之(本学教授・研究員)「方法としての『坂東本 教行信証』—「正信偈」を手がかりに①」
- ⑧2009年10月28日 共同研究研究会
加来雄之(本学教授・研究員)「方法としての『坂東本 教行信証』—「正信偈」を手がかりに②」・「『教行信証』(坂東本)の文体研究に向けて」
- ⑨2009年11月18日 共同研究研究会
織田顕祐(本学教授・研究員)「大乘仏教の日本的展開と『教行信証』の要務」
- ⑩2009年12月23日 共同研究研究会
加来雄之(本学教授・研究員)「共同研究成果報告(案)」
- ⑪2010年1月8日(於大谷大学) 公開研究会
金子彰(東京女子大学)「親鸞遺文の国語学的研究から」
- ⑫2010年3月10日(於大谷大学) 公開研究会
鳥越正道(九州教学研究所所長)「引用の解釈学—『坂東本 教行信証』における引文導入語と指示語」
- ⑬2010年3月17日(於大谷大学) 公開研究会
広瀬惺(同朋大学教授)「『教行信証』の構成—各巻の位置について—」
- ⑭2010年3月30日(於大谷大学) 公開研究会
ケネス・田中(武蔵野大学教授・国際真宗学会会長)「北アメリカの大学における仏教学・教育の状況—真宗研究を中心に」
- 以上が研究期間中に終えた研究発表である。また研究期間は終えたのちも、成果の公表に向けて共同研究会と研究発表会を行っている。発表のみを報告しておきたい。
- ⑮2010年6月30日(於大谷大学) 研究会
浦山あゆみ(本学准教授・研究員)「『教行信証』にお

ける漢字音～唇内入声字のふりがなめぐって～」

①2010年11月(予定)

一楽真(本学教授)「親鸞の諸著作における『教行信証』の位置」(仮題)

藤枝真(本学准教授)「宗教文献におけるレトリックの問題」(仮題)

これらの研究発表からいくつかを選択して報告書「『教行信証』(坂東本)研究の可能性」(仮題)を作成する予定である。内容は、本論(論文・講演録)と附録とから構成される。本論は、第一部を「『教行信証』(坂東本)というテキスト」(仮題)として、『教行信証』(坂東本)というテキストの親鸞の著述における、もしくは『教行信証』諸本中における地位を確定し、その上でそのテキストが有する文献的な特徴と課題を明確にする。第二部は「『教行信証』(坂東本)の思想」(仮題)として、『教行信証』における主要な概念として、回向・仏土・歴史の問題をとりあげて、その解釈の可能性を確かめる。第三部は、「Ⅲ 『教行信証』の解釈」(仮題)として、『教行信証』の解釈における構造論的視点、国文法の用法、圏点の問題、宗教的文献におけるレトリックなどを取り上げる。附録としては、先行研究を基礎にして『教行信証』がどのように伝播・公開されてきたかを概観するための資料(「教行信証諸本リスト」・「教行信証」関係年表)を提供する予定である。

共同研究

近代真宗大谷派の社会実践に関する研究 —保育・教育・福祉での 教学から実践への展開—

研究代表者・教授 佐賀枝 夏文
(社会福祉学)

3部門研究

本研究において、教育・保育・福祉が連携をとりながら研究をすすめる目的としては、「真宗教学と実践」は個々にあるのではなく通底していなければならないと考えられる。このように考えれば、3部門が連携しなければならないことが明確であるといえる。しかし、それぞれの設立のあゆみや社会的な状況などが実践に及ぼした要因もおおきいこともあり、分析整理しておく必要があると考えられる。今回は、3部門の研究の

進捗を報告しておきたい。

教育部門

真宗大谷派は、全国に多くの教育機関としての「学校」を展開している。日々、生徒達の学びと育ちを支えているのである。そして各学校は、真宗の教えを基盤として「建学の精神」をたて、その実践にあたっているのである。しかし実際の現場は、社会的な関係性の中で多くの課題を抱えているのである。そこで、関係学校の中から、大谷高等学校、京都光華高等学校、大成高等学校の現場の先生方と研究体制を構築し、長年にわたり、真宗に立脚したの教育の実践を進められた広小路亨先生(元大谷中・高等学校校長)の「思想と実践」への学びを進めている。研究会と同時に、公開研究会を広小路先生に御縁の深い、真城義磨先生(現大谷中・高等学校校長)、宮城駿先生(真宗大谷派関係学校連合顧問)、多田孝圓先生(元大谷中学高等学校校長・現 真宗大谷派圓乗寺住職)を招聘し、行っている。

保育部門

本研究班の「保育部門」としては、真宗大谷派宗門の団体である社団法人大谷保育協会の研究事業と常に連携し、1. 文献資料の収集と整理、2. 実践現場の課題の抽出といった2本を柱として研究を展開している。

本研究をめぐる大きな課題としては、「保育部門」でいえば、多様な背景をもって真宗保育に関わる保育者の育成である。これは「保育部門」に限らず、教育・福祉の部門においても非常に大きな課題である。またこの課題は、現代のみならず、「真宗教学と実践」ということで常に課題となってきたことである。この課題への視点を、1. 文献資料の収集と整理と2. 実践現場の課題の抽出から、具体的に把握していくことを研究の目的とする。

このことをとおして、真宗大谷派の保育「真宗保育」の現代的意義を、理念と実践の両面から明らかにするための基礎研究である。

1. 文献資料の収集と整理

真宗大谷派の保育事業は、わが国の保育事業の中でも先駆的な展開をしてきた。その歴史を文献資料の整理や(社)大谷保育協会に長年関わってこられた方々へのヒアリングをとおして、真宗大谷派の保育「真宗保育」の歩みを把握していきたい。また真宗大谷派の保育関係の出版物は顕彰すべき内容もおおく、その収集が重要である。このことは、「保育」そのものの課題への視点を整理することになっていくと考えられる。

2. 実践現場の課題の抽出

「保育部門」では(株)大谷保育協会加盟の幼稚園・保育園の実践現場の先生方と協同し、具体的な実践課題を推究している。その中では、現場における真宗教学への理解という課題が大きい。このことから実践現場にいる保育者自身の真宗への関心についても調査を展開していくことを計画している。

また具体的な実践課題としては、「カリキュラム」の構築を視野にいたれた研究を(株)大谷保育協会と協同で展開している。その目的遂行のために、各園での具体的な行事や活動例を収集をおこなっている。

福祉部門

真宗大谷派は明治期において、多大な社会貢献の足跡を残している。その代表的な事業としては監獄教誨、免囚保護事業である。わが国の教誨師の道を開拓した策輪対岳、それにつづく寺永法専は開拓者として、おおきな足跡を残した。明治中期における慈善事業での社会貢献においても顕著なあゆみが残されている。大谷派慈善協会による雑誌「救済」の出版、その後の仏眼協会による点字雑誌「仏眼」の出版は輝かしい業績として高く評価されている。このような「あゆみ」をもった真宗大谷派の社会福祉の実践、その理念について先人の業績の顕彰すること、また基盤整備をすすめることが目的のひとつである。

期待されること

真宗大谷派の関係学校には、社会福祉学と関係のある学部・学科・コースを設置しているところが少ない。関係学校では「建学の理念」と社会福祉学、社会福祉実践が謳われており、「真宗の教え」にもとづく実践者が養成されている。「いま」関係者が、より明確にしなければならないこととしては、「真宗大谷派の関係学校でなければならない理由」、「他の養成校との違い」を明確に打ち出す必要がある。社会福祉は、「近代化」のおおきなうねりのなかで、必要不可欠なものとして発展してきた。しかし、時勢に流されれば、「人間」不在の社会福祉に加担することになりかねない。社会福祉学が一般論として構築したもので「福祉問題」は解けない。わたしたちは、親鸞聖人の教え導かれる、すべてのひとが「生きるよるこびと出会える」社会福祉実践の理論を構築しなければならないだろう。

共同研究

元朝期の言語接触に関する 文献学的研究

研究者代表・准教授 渡部 洋
(中国語・近世の中国語文法)

本研究の目的は中国語とモンゴル語の合璧碑文の資料を用いて各言語を専門に研究する者が中心となり、更にペルシャ語、チベット語、契丹語等の資料の扱いに通曉した研究者との協働によって、13世紀元王朝支配下に形成された「多言語環境」の言語接触状況を解明するための手がかりとなるバイリンガル資料についての基礎データを学界に提供することにある。基礎資料の主な内容はバイリンガル資料の解読結果の提示、モンゴル語と漢語との比較対照による両言語の語彙や文構造の分析、モンゴル語と他の諸言語（ペルシャ語、チベット語）との関係の考察、資料及び現地調査に基づく史実の確認と時代背景の考察等である。

活動の柱である資料解読は毎月2回のペースで開催している研究集会で行っている。参加者は代表の渡部、研究分担者の松川節（本学教授）、協同研究員の古松崇志（岡山大学准教授）、小野 浩（京都橘大学教授）、石野一晴（千里金蘭大学非常勤講師）、毛利英介（神戸女子大学非常勤講師）、研究協力員の伴真一朗（本学大学院博士後期課程修了）及び研究支援者の清水奈都紀（同志社大学情報学部研究支援員）の計8名である。渡部は、研究分担者・協同研究員・研究協力員と密接に連絡を取りつつ、研究全体の推進に努めている。担当分野は、漢文資料の解読及び文法解釈である。松川は、モンゴル語資料の解読を担当し、古松は、漢文資料の解読及び歴史的背景についての研究と共に京都大学文学部所蔵の関係資料や拓本についての調査を担当している。小野はトルコ語・ペルシャ語資料の解読を担当し、石野は漢文資料・諸言語資料に現れる中国仏教的概念についての解読を担当している。毛利は漢文資料・モンゴル語資料に現れる契丹・女真に関係する概念についての解読を担当している。伴は漢文資料・チベット語資料の解読を担当し、清水は考古学・遺跡保存学的観点から、碑刻資料の出土状況及び立地条件についての調査を担当している。このような体制で資料の解読を行い、モンゴル語と漢文双方の意味内容に関しての

比較対照を通して相違する点を抽出し、各研究者がそれぞれの視点から相違する原因や理由を探っている。また、この作業過程を通して各資料における未発見の史実や碑文特有の語彙や修辭法についても詳細に検討を行っている。

現在、以下5点の碑文の解説作業が終了している。

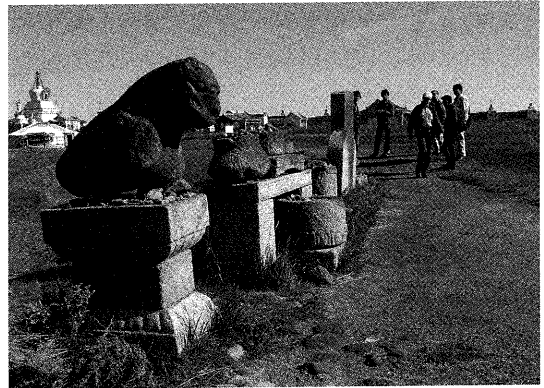
- 1「張氏先塋碑」(1335年：中国、内モンゴル自治区赤峰市翁牛特旗 現存)
- 2「達魯花赤竹公神道碑銘」(1338年：中国、内モンゴル自治区赤峰市翁牛特旗 現在所在不明)
- 3「居庸關過街塔六体合璧造塔功德記」(1345年：中国北京市 現存)
- 4「刺賜興元閣碑」(1346年：モンゴル国、ウランバートル市のモンゴル科学アカデミー考古研究所及びハラホリン市エルデニゾー寺院に一部現存)
- 5「西寧王折都公神道碑」(1362年：中国、甘肅省武威市永昌鎮 現存)

上記5点の解説作業を行う一方、中国、台湾及びモンゴルでの現地調査も実施しており一定の成果を得ている。中国及び台湾における元代の碑文や文献についての調査活動によって幅広い情報を得ることができ、その後の資料解説に大いに役立った。特に武威市の調査で「西寧王折都公神道碑」の不鮮明な文字を確認することができたことは正確な資料解説につながり、更にその碑文の立地場所から当時の騎馬民族の具体的な動向についても知ることができた。又、本年は科学研究費補助金を受けモンゴル国のウランバートル市のモンゴル科学アカデミー考古研究所と博物館及びハラホリン市で碑文調査を行った。この調査ではモンゴル語、漢語、テュルク語で書かれた数多くの碑文を見ることができ文面を直接確認することができた。中でも「刺賜興元閣碑」についての詳細な調査と文字異同の確認ができたことは大きな収穫であった。

月2回の研究集会での解説作業と現地調査活動によって上記5点の碑文研究は大きく前進し数多くの成果を得た。例えば、モンゴル語と漢語の内容は必ずしも完全に一致しているわけではなく、異なる内容のものや省かれている部分も見られる事実は難解で断定はできないが、当時の騎馬民族のもっている習慣や思考の違い、或いは歴史的な状況等から検討を加えた結果一応の回答を用意することができた。また、漢語では碑文にしか見られない特徴ある表現や語彙の運用が見られたが、これらは今後の漢語研究の対象として提示できるものと考え。一方、モンゴル語には、漢字音を転写したようなものやテュルク語やチベット語と関連性をもつ語彙なども見つかっており、当時のモンゴル語の語彙研究に大いに役立つ

ものと考え。中には、モンゴル学者として著名なクリーブスF. W. Cleavesの訳注でも言及されていないものもあり、新しい発見と思われる。

以上が現時点での進捗状況であるが、研究成果としてこれまで解説した碑文について一部訳注という形で紀要に発表しようと考えている。本共同研究は中国語、モンゴル語、ペルシャ語、及びチベット語等各言語の専門家が結集しているので、訳注はこうした利点を活かした内容とし、元代の言語研究及び歴史研究に些かなりとも寄与できるものになればと思う。



モンゴル国、ハラホリン市エルデニゾー寺院の狛犬象

学術共同研究報告

中国社会科学院歴史研究所との共同研究・公開研究会報告

国際仏教研究 研究員・准教授 松浦 典弘

本学真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所は、2010年3月に学術交流協定を結び、未永く交流を深め、双方の研究に寄与することを目指している。この度その一環として、中国社会科学院歴史研究所から、齊克琛副研究員（中国社会科学院歴史研究所科研処長）、常建国氏（中国社会科学院歴史研究所事務主任）、李錦繡研究員（中国社会科学院歴史研究所中外関係研究室主任）の3人が来日され、李錦繡先生の御報告による公開研究会を開催することができたので、その概略を報告する。

公開研究会は7月8日(木)午後4時20分から、本学響流館4階の本研究所ミーティングルームにおいて行われた。社会科学院からの三名の先生と真宗総合研究所所長の藤嶽明信教授のほか、礪波護元教授、大内文雄・松川節両教授、藤井政彦非常勤講師、福島重任期制助教、大学院生の今西智久・濱野亮介・河邊啓法の三氏、さらに本研究班からは研究員の桂華淳祥・浅見直一郎両教授、研究補助員で通訳担当の王奕明氏、及び松浦が出席した。

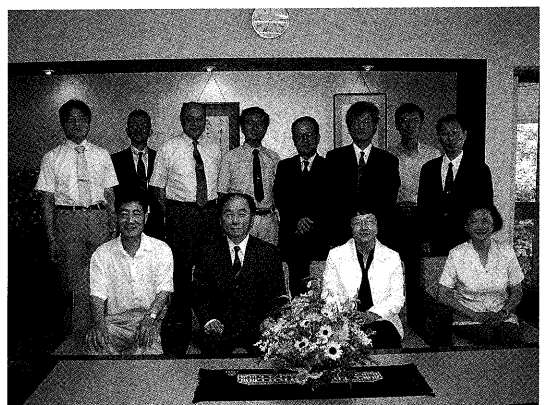
李錦繡先生は「固原出土史訶耽墓誌考証」と題して報告された。固原は寧夏回族自治区南部に位置し、近年発掘の成果が続々と発表されている。今回の御報告も編纂文献史料に加え、発掘の成果である墓誌を利用することで、従来の研究を発展させたものである。1980年代に固原で発掘された隋唐墓地の中でも史氏家族墓は中国内外の学界から注目されたが、そこから出土した墓誌の中で最も関心を集めたのが、今回取り上げられた史訶耽の墓誌である。近年日本の学界において、当該時代のソグド人の活動が注目されており、ソグド人である史訶耽の墓誌は日本人による研究成果もあげられている。日本の研究者の業績にも精通しておられる先生は日中双方の研究状況を踏まえた上で、墓誌の内容に関して検討を進められ、そこから窺われる史訶耽の事績を通して、隋代末期から唐代初期の政治状況や馬政などに考察を加えられた。綿密な史料の読解に基づき、新しい視点も示された御報告は価値のあるものであり、終了後は活発に議論が交わされた。先生の最新の成果に基づいて行われた研究会は、参加者にとって極めて有意義なものとなった。

研究会終了後は、会場を移して懇談会が開催された。引き続き、意見交換がなされると共に、出席者全員が自己紹介も兼ねたスピーチを行うなど、和やかな雰囲気の

もと、楽しいひと時が過ぎていった

齊克琛・常建国・李錦繡の三先生は、7月5日(月)に関西国際空港に到着され、齊・常両先生は10日(土)、李先生は11日(日)に帰国されるという日程であった。この間、6日(火)には学長室を表敬訪問され、草野顕之学長らと会談、夜は本研究所在主催の歓迎会に参加され、相互の交流を深めた。また、本学博物館で夏季企画展「日本画家 皇中光享の眼 インド・仏教美術の流伝」を參觀されたほか、奈良の唐招提寺・東大寺において仏教史蹟調査をされ、清水寺など京都の寺院も訪れられた。李先生は本学図書館で熱心に史料収集に努められ、本学の蔵書から多くの成果を得られたようであり、日本の研究者との交流も積極的に行われるなどして、精力的に研究活動をこなされていた。

短期間の忙しい日程ではあったが、三先生とも充実した日々を過ごされたようである。協定が結ばれてから約4カ月、学術交流はまだ緒に就いたばかりである。今回の公開研究会及び共同研究をきっかけに益々相互の交流が深まっていくことを期待したい。



中国社会科学院歴史研究所 本学表敬訪問記念撮影 於学長室
前左より 常氏 草野学長 李研究員 齊副研究員

海外研究調査報告

スリランカにおける貝葉写本研究の現状

一般研究(山本班) 協同研究員・ダシュ ショバ ラニ

一般研究(山本班)の協同研究員として、スリランカにおける貝葉写本の現状、つまり、貝葉写本製作技法やその伝統的な保存方法、宗教概念に関する研究調査・資料収集のため、2010年8月13日(金)~2010年9月5日(日)までスリランカを訪れた。(なお、本調査出張は、2010年8月9日(月)~11日(水)まで、バンコクのチュラロンコン大学主催でバンコクのImperial Queen's Park Hotelにて開催された国際学会International Conference on Buddhist Narratives in Asia and Beyondへの参加、及びタイ王国における貝葉写本研究の調査の期間を含めて全体としての出張期間は2010年7月24日(土)~2010年9月25日(土)までだったが、その中のスリランカに関する調査のみを報告する。)

2010年8月13日(金)TG307 便でバンコクのスワルナプーミ国際空港よりスリランカのコロomboへ出発した。

8月15日(日)・16日(月):コロombo市内のデーヒワラにある仏教文化センター(Buddhist Cultural Centre)へ行き、センター長のVen. Kirima Wimalajothi(僧侶)と会って、写本研究に関する懇談を行なった。当センターはスリランカに於ける仏教関係書物の最大の書店だけではなく、貝葉写本から仏典を活字で出版している出版社としても有名である。2007年のハンブルグ大学主催の学会の際にウイマラジョーティ僧侶と面識があったため、何も問題なく、いろいろな情報をいただいた。そして、彼の尼僧院を訪問することもでき、10人の沙弥尼と4人の比丘尼と会うことができた。その中に来年6月に具足戒が予定されているスリランカ国内やタイ王国の6人の沙弥尼たちとも懇談でき、スリランカやタイ王国に於ける比丘尼制度復活に関する問題について新たな情報を得た。(スリランカを始めとし、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマーなどのテーラヴァーダ仏教の国々では、比丘尼の系譜がなくなっているため、現在、女性が出家して沙弥尼になることができるが、具足戒を受けて比丘尼になることがまだ正式に認められていない。そこで、数年前から、スリランカにおいて比丘尼制度の復活の動きが始まっている。故に、ウイマラジョーティ僧侶のこの活動も今後大変注目されるであろう。)

8月17日(火)~21日(土):コロomboにある国立博物館(National Museum)、国立図書館・資料館(National Library and Documentation Services Board)、およびケー

ラニヤ大学(University of Kelaniya)を訪問し、貴重な貝葉写本の撮影、資料収集を行なった。国立博物館や国立図書館・資料館で行われている貝葉写本保存修復についても調査した。国立博物館の保存・修復担当部の担当者Nilmini Neththasinghe、国立図書館及び資料館の保存・修復担当部の担当者Udaya Cabral氏との話は今後の研究に大きな材料となると思われる。これらの機関の保存修復に関する専門家たちは、オリッサへ渡り、Indian National Trust for Art and Cultural Heritage(貝葉写本を含む美術品保存修復に関する全国的な組織で、INTACHの名前でよく知られている)の指導のもと一定の研修期間を終え、その知識をスリランカの貝葉写本保存・修復に活用している。

ケーラニヤ大学では、大谷大学卒業生のウディタ・ガルシンハ(Udita Garusinha)博士が現在准教授として在籍し、彼の協力もあっていよりも調査をスムーズに行うことができた。なお、ガルシンハ博士の尽力により、2009年8月10日に大谷大学とケーラニヤ大学との間に学術交流協定が結ばれた。

8月22日(日)~27日(金):ペラデニア大学、アルヴィハハラ寺院、パッレボラ貝葉写本作製寺院及びブッダ・シュラヴァカ大学を訪問した。

キャンディーにあるペラデニア大学(University of Peradeniya)を訪問し、資料収集を行なった。ペラデニア大学は最近貝葉写本の研究に大変力を入れている大学である。副図書館長のChampa Nilmini Kumari Alahakoon氏は貝葉写本の研究に従事していて、いくつかの評価の高い論文も出版されている。Alahakoon氏の協力でペラデニア大学図書館所蔵の貝葉写本も閲覧することができた。現在、約4800のテキストが2353束に結ばれて保管されている。213葉からなる13世紀に書かれたVisuddhimaggaの注釈書(写本番号276985)も当大学図書館の宝物の一つである。一応きれいな状態には保管されているが、その置き方や取り扱い方に注意が必要であると感じた。

マータレにあるアルヴィハハラ寺院でスリランカの最初の経典が書かれていたと言われている。しかし、それは時代の流れの中で所在不明の状態になっているため、貝葉に書かれた三蔵の完全セットが再び作られてこの寺院に所蔵されている。さらに、貝葉写本作製技法の伝統も失われてしまったため、それを再び復興させるために

努力している寺院として有名である。観光客が訪れる時に、どのように貝葉の上に文字を刻んで写本を作製しているかを見ることが可能である。その道具なども陳列されている。

次に、マータレからポッレボラのシュリー・ヴェールヴァナ・ピリヴェーナ (Sri Veluvana Pirivena) 寺院へ行った。住職のメルピティイエー・ウィマララタナ長老 (Ven. Melpitiye Wimalaratana Thero) をケラニア大学の図書館・情報学科の講師ピヤラタナ長老 (Ven. Piyaratana Thero) より紹介をいただき、予めコンタクトを取り、貝葉写本作製方法を披露してもらう許可をいただいていた。ここで、住職の指導のもと、彼自身及びその他の僧侶、研修生、村人たちの共同作業としてターラ樹の若葉を切断するところから、それは様々なプロセスを経て貝葉写本として出来上がるまでの一連の作業をしてもらい、それを撮影記録した。

最後に、アマラーダープラにある僧侶専用の大学ブダシュラーヴァカ・ピクシュ大学 (Buddhasravaka Bhiksu University) の仏教学科の講師ミリスワッテ・ウィマラギヤーンナ 僧侶 (Ven. Miriswaththe Wimalagnana) および当大学副図書館長のティッサ・バンダラ博士 (Dr. Tissa Bandara) より協力をいただいた。ティッサ・バンダラ博士はスリランカに置ける貝葉写本研究の第一人者であり、彼の博士論文の一部も研究資料として使う許可を得た。

2010年8月28日(土)～9月4日(土)：コロンボにある国立博物館へ行き、当館所蔵の貝葉写本の閲覧し、ヴェッサンタラ・ジャータカの複写を入手した。その際、当館出版部の部長エーカーナヤカ氏 (Ekanayaka) 及びそのスタッフのT. H. Nilantha Indika氏により得られた協力は大変感謝すべきである。ケラニア大学図書館へ行き、図書館長のL. A. Jayatissa氏の協力で貝葉写本に関する貴重資料の閲覧及び収集をすることができた。

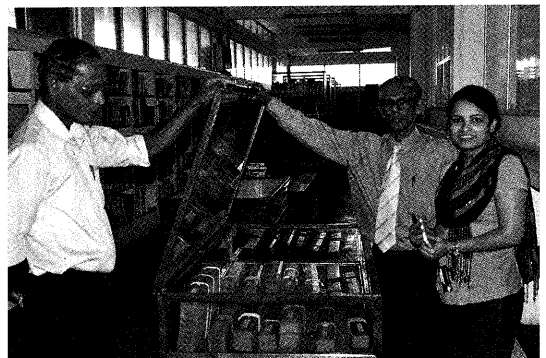
2010年9月5日(日)：TG308便でコロンボ国際空港を出発して、翌日バンコクのスヴァルナプーミ国際空港に到着した。

アショーク王の時代からインド東部・オリッサ州と東南アジアや南アジアの国々は宗教や貿易を通して結ばれていたことは周知の通りであり、仏教やヒンドゥー教とともに様々な文献も伝えられた。今回の調査でタイとスリランカの貝葉写本研究について情報を収集するだけでなく、両国に見られる貝葉写本製作技法やその伝統的な保存方法、宗教概念についても研究調査を行った。これは、オリッサの貝葉写本文化との関係を明白にするるとともに貝葉写本がかつて紙代わりに扱われていた国々の文化の一側面を明らかにし、その変遷についても具体的

に伝えることができる研究材料となるに違いない。



国立図書館・資料館所蔵の貝葉写本



ケラニア大学所蔵貝葉写本閲覧
図書館長のL.A. Jayatissa氏(中)筆者(右)



シュリー・ヴェールヴァナ・ピリヴェーナ寺院での
貝葉写本作製の協同作業

真宗総合研究所彙報 2010.5.1~2010.9.30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇5月26日(水) 16時20分~第3会議室(博綜館5階)

1. 2009(平成21)年度「決算」について
2. 2010(平成22)年度「予算」について
3. 2010(平成22)年度「一般研究」の研究組織について
4. その他

◇6月17日(木) 12時20分~第4会議室(博綜館5階)

1. 2010(平成22)年度「客員研究員」の採択について
2. その他

○研究補助員雇用契約事務説明会

◇5月17日(月) 12時10分~(真宗総合研究所ミーティングルーム)

1. 研究補助員辞令交付
2. 雇用契約の締結について
3. 研究補助業務に関する事務説明
4. その他

■特別指定研究

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

◇5月17日(月) 13:00~15:00(真宗総合研究所フリースペースデスク)

文献目録パート会議

◇5月18日(火) 14:40~16:10(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第23回研究会

議題

- ・今年度の研究活動方針について
- ・御遠忌記念論集『親鸞像の再構築』について
- ・文献目録の作成について

なお、日常的に文献目録作成のための作業を行っている。

■指定研究

国際仏教研究

〈英語班〉

《会議》

①研究員・補助員の打合せ会議

本年度の活動・分担について

6月1日(火) 16:20~

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

②近代教学英訳アンソロジー出版関係会議

9月24日(金) 12:00~13:00

(真宗総合研究所フリースペースデスク)

《公開講演会》

①6月17日(木) 16:20~18:00

於: マルチメディア演習室(響流館3階)

講師: ケネス・田中氏

(武蔵野大学教授・国際真宗学会会長)

題目: 真宗の国際化と国際真宗学会の役割:

2011年8月大谷大学に於ける第15回学術大会に向けて

また上記の他、従来収集してきた仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開のために資料整理を随時行っている。

〈ドイツ・フランス班〉

◎2010年5月5、6日に、パリにてフランス国立高等研究院(EPHE)とのシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」が開催された。同院と本学は学術協定を結んでおり、2006年には本学において大谷大学真宗総合研究所・EPHE合同シンポジウム「宗教と近代合理的の精神一日仏文化の比較をとおして」が開催されており、今回のシンポジウムはその続編ともいえるものである。

【プログラム】

5月5日

10:15 開会の挨拶 フィリップ・ポルティエ(EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL主任研究員)

司会 ジャン=ノエル・ロベール(EPHE・ソルボンヌ大学教授)

10:30 ロバート・F・ローズ(大谷大学教授)

The Buddhist-State Relationship in Japan: Some Observations on the Thought of Saichō and Kūkai, Two Early Medieval Monks of the Ninth Century (日本における仏教と国家—最澄と空海の思想についての一考察)

11:00 ドウニ・ベルティエ(EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL研究員)

Entre Vichy et la Résistance: qu'est-ce que la "France catholique" (1940-1944)? (ヴィシーとレジスタンスとの間—〈フランス・カトリック〉とは何か [1940-1944])

11:30 井上尚実(大谷大学准教授)

The Transformation of Japanese Buddhism during the 19th century: Focusing on the Impact of the Meiji Restoration

and the Persecution of Buddhism (19世紀における仏教の変容—明治維新と廃仏毀釈の影響を中心に)

司会 ヴァンサン・ゴーセル (CNRS教授、GSRL研究員)

14:00 ジャン＝ポール・ヴィレーム (EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL研究員)

Identité nationale française et protestantisme (フランスのナショナル・アイデンティティとプロテスタンティズム)

14:30 村山保史 (大谷大学准教授)

State and Religion in the Thought of D. T. Suzuki (鈴木大拙の思想における国家と宗教)

15:30 ティエリー・ルテール (マイアミ大学 [米国オハイオ州] 政治学科教授)

Pour une sociologie politique de la laïcité en France (フランスにおける世俗化の政治社会学試論)

5月6日

司会 アラン・ロシエ (EPHE・ソルボンヌ大学教授)

11:00 飯田剛史 (大谷大学教授)

The Contemporary Situation of Japanese National Identity: Co-existence vs. Anti-foreign Movements (日本のナショナル・アイデンティティの現状—共存と反外国人運動)

11:30 ジャン・ボベロ (EPHE・ソルボンヌ大学名誉教授、GSRL研究員)

Laïcité et identité nationale sous la V^{ème} République (第五共和国下における世俗化とナショナル・アイデンティティ)

12:00 藤枝真 (大谷大学准教授)

Indoctrinating the Younger Generation: A Strategy of Yasukuni Shrine for the Propagation of Patriotism (若い世代の教化—靖国神社の愛国心普及戦略)

司会 フィリップ・ホフマン (EPHE・ソルボンヌ大学教授、宗教科学部学部長)

14:30 ピエール・ビルンボーム (パリ第1大学・ソルボンヌ大学名誉教授)

Eglise et Etat en France et aux Etats-Unis (フランスとアメリカ合衆国における宗教と国家)

15:00 番場寛 (大谷大学教授)

Essai sur le discours religieux dans le Japon contemporain: autour des différents noms de Shinran et du Namuamidabutsu (宗教の〈ディスクール〉への試論—親鸞と南無阿弥陀仏の異名をめぐって)

16:00 フィリップ・ポルティエ (EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL主任研究員)

Le retour de la question de l'identité nationale dans la France contemporaine (現代フランスにおけるナショナル・ア

イデンティティの問題の再来)

17:00-17:15 閉会の挨拶 ジャン＝ポール・ヴィレーム (EPHE・ソルボンヌ大学教授、GSRL主任研究員)

◎2010年8月15日～21日に開催された、第20回国際宗教学・宗教史学会学術大会 (XXth World Congress of the International Association for the History of Religions) に藤枝真研究員 (本学准教授) が参加した。今回の大会の全体テーマは「Religion: A Human Phenomenon (宗教: 人間による現象)」であり、これは「宗教の超越性」を強調するのではなく、宗教を人間の一つの営みとして捉えることを意図したものである。藤枝研究員は、「Keeping Up the Grand Narrative: National Identity and State Shintoism in the Public Sphere」(「大きな物語」を保ち続けること: 公共領域におけるナショナル・アイデンティティと国家神道) というテーマで発表した。

◎村山保史研究員 (本学准教授)、廣川智貴研究員 (本学専任講師)、藤枝真研究員 (本学准教授) によって、マールブルク大学神学部Dietrich Korsch教授の*Luther: Eine Einführung* (Mohr Siebeck) の翻訳が進められている。

〈中国班〉

①大谷大学図書館蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の資料一覧作成

中国華北地域関連の綴資料 (仮番号19～25) および華中地域関連の綴資料 (仮番号26～) の目録作成作業を継続中。

②中国社会科学院歴史研究所との共同研究の推進

本研究所と中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づき、2010年7月5日(月)～10日(土)、齊克琛中国社会科学院研究所歴史研究所副研究員、常建国中国社会科学院歴史研究所事務室主任、李錦繡中国社会科学院歴史研究所研究員が、本学を表敬訪問し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松浦典弘研究員とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

7月8日(木) 16:20～18:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

○固原出土史詞託墓誌考証

中国社会科学院歴史研究所 李錦繡研究員

西藏文献研究

《研究打合せ》

◇4月13日(火)

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

「2010年度西藏文献研究班第一回ミーティング」

◇7月27日(火)

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

「2010年度西藏文献研究班第二回ミーティング」

《学会参加》

◇8月15日(日)～21日(土)

参加者：白館戒雲

学会名：第12回国際チベット学会

場 所：プリティッシュ・コロンビア大学 (バンクーバー、カナダ)

「指定研究」大谷大学 DB 研究

《事務連絡会議》

◇7月6日(火) 12:10～13:00

議 題：大谷大学所蔵北京版大蔵経デジタル・データ化作業

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

《学会参加》

◇2010年5月29日(土) 10:00～18:00

参加者：清水洋平 (嘱託研究員)

学会名：パリー学仏教文化学会第24回学術大会

場 所：南山大学名古屋キャンパス

《研究者招聘》

◇2010年8月30日(月)～9月5日(日)

招聘研究者：Jacqueline Fillionat 女史 (Honorary lecturer, École Française d'Extrême-Orient)

目 的：日本に滞在中のパリー語貝葉写本研究の第一人者である同女史を招聘して、大谷大学所蔵パリー語貝葉写本について、稀覯文献の選定などに関わる共同研究の実施。

《出張》

◇2010年9月7日(火)～9月8日(水)

出張者：佐々木秀英 (真宗同朋会運動研究班：研究補助員)

：安居宏淳 (真宗同朋会運動研究班：研究補助員)

：和田真典 (真宗同朋会運動研究班：アルバイト)

出張先：真宗大谷派難波別院 (大阪府大阪市中央区久太郎町4-1-11)

目 的：デジタル化予定のネガフィルム整理

*DB研究班より委託。

真宗同朋会運動研究

《事務連絡および定期研究会》

◇2010年度：毎週月曜日 13:00～16:10 (3・4限)

研究会、調査のテーブル起こしとその成文化、そして、

内容の位置づけを行うため、読み合わせを実施している。

《公開研究会について》

2010年5月1日～9月30日の期間については、下記の日程で行った公開研究会のテーブル起こしとふり返りを中心に展開している。

5月20日 上田閑照先生 (京都大学名誉教授)

テーマ：清沢満之とは誰か

～当時において、そして現在のわたしたちにとって～

6月2日 亀井鑑先生

テーマ：真宗同朋会運動について

～そのあゆみと今後の展開～

2010年度の今後の予定としては、末木文美士先生などを招聘し、公開研究会を行う予定である。

《聞き書き調査の実施》

聞き書き調査の実施は、本研究の中心課題であり、主に門信徒の方々に行う調査である。

本調査は、「聞き書き」という手法の特性から、1件あたりの調査お間に膨大な時間を要する。そのため本年度は2010年9月までに、全国各地で約10件の調査を行ってきた。詳細な調査内容については、ここでは省略する。

また今後も引き続き聞き書き調査を随時行っていく予定である。

真宗本廟 (東本願寺) 造営史資料室

2010年度の研究計画と編集計画に基づき、各執筆者から提出された原稿の読み合わせと整理、引用・典拠資料の確認等の作業を中心に、『本願を受け継ぐ人びと—真宗本廟 (東本願寺) 造営史—』の編集を推進している。合わせて、本編及び資料編に掲載すべき諸資料・図版の選定・写真撮影を行うと共に、造営史関連諸資料の調査・研究を継続して編集作業を補完していく。

《原稿読み合せ会》

第13回原稿読み合せ会

◇5月12日(水) 14:00～17:30

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第14回原稿読み合せ会

◇5月19日(水) 10:40～12:00

場所：川端個人研究室 (聞思館3階)

第15回原稿読み合せ会

◇5月26日(水) 14:00～19:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第16回原稿読み合せ会

◇6月2日(水) 14:00～19:30

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第17回原稿読み合せ会

◇6月9日(水) 14:00~19:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第18回原稿読み合せ会

◇6月16日(水) 14:00~19:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第19回原稿読み合せ会

◇6月30日(水) 14:00~18:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第20回原稿読み合せ会

◇7月7日(水) 14:00~20:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第21回原稿読み合せ会

◇7月14日(水) 14:00~17:30

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第22回原稿読み合せ会

◇7月21日(水) 14:00~19:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第23回原稿読み合せ会

◇7月28日(水) 14:00~18:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第24回原稿読み合せ会

◇8月4日(水) 13:00~15:30

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第25回原稿読み合せ会

◇8月5日(水) 14:00~18:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第26回原稿読み合せ会

◇8月10日(水) 13:00~19:30

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第27回原稿読み合せ会

◇8月24日(水) 13:00~17:30

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第28回原稿読み合せ会

◇8月26日(水) 13:00~20:30

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第29回原稿読み合せ会

◇8月30日(月) 13:00~20:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第30回原稿読み合せ会

◇8月31日(水) 13:00~19:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第31回原稿読み合せ会

◇9月1日(水) 13:30~18:30

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第32回原稿読み合せ会

◇9月10日(金) 13:30~16:30

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第33回原稿読み合せ会

◇9月14日(水) 13:30~19:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第34回原稿読み合せ会

◇9月15日(水) 13:30~19:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第35回原稿読み合せ会

◇9月22日(水) 13:30~19:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第36回原稿読み合せ会

◇9月29日(水) 13:30~19:00

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

《その他編纂会議・打合せ》

◇7月14日(水) 10:00~17:00

議題:資料編纂図面選定打合せ

場所:真宗総合研究所当資料室デスク

◇7月16日(金) 14:00~16:00

議題:真宗大谷派宗務所担当部署との編纂打合せ

場所:真宗大谷派宗務所

◇7月22日(水) 14:00~16:00

議題:資料編纂図面選定打合せ

場所:プレゼンテーションルーム

◇8月6日(金) 9:00~16:30

議題:資料編纂資料翻刻記事選定会議

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

◇8月18日(水) 10:00~16:00

議題:資料編纂図面選定会議

場所:プレゼンテーションルーム(響流館4階)

《その他》

◇9月27日(月)~29日(水)

内容:資料編纂等図面写真撮影

場所:写真撮影室(響流館4階)

■人事

□客員研究員

*ロバート F. カンパニー (Robert F. Company)

国 籍 アメリカ合衆国

研究期間 2010年7月9日～2010年7月30日 (新規)

研究課題 「初期中世中国における仏教の諸相」

*マーク L. ブラム (Mark L. Blum)

国 籍 アメリカ合衆国

研究期間 2010年8月18日～2011年8月31日 (新規)

研究課題 「念仏の歴史」

*正 月 (Zhengyue)

国 籍 中華人民共和国

研究期間 2010年10月1日～2011年4月15日 (新規)

研究課題 日本におけるモンゴル言語学の研究現況

□特別研究員

*清水洋平

国 籍 日本

現 職 本学非常勤講師・嘱託研究員 (大谷大学
DB研究)

研究期間 2010年8月25日～2012年3月31日

研究課題 タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東
南アジア撰述仏教説話写本の研究

研 究 所 報 第 57 号

2010年10月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

©2010 Otani University Shin Buddhist Comprehensive
Research Institute